

朱の花粉



朱の花粉

舟橋聖一



講談社版

朱 の 花 粉



昭和34年10月25日 第1刷発行

著 者 ふな ばし せい いち
 舟 橋 聖 一

¥320

発行所 東京都文京区音羽町 3-19
 野 間 省 一

印刷所 東京都文京区関口町 140
 慶昌堂印刷株式会社

発行所 東京都文京区
 音羽町 3-19

株式会社 講談社
 振替 東京 (3930)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (黒柳製本)

© Seichi Funahashi

朱
の
花
粉
2

裝幀
三
岸
節
子

目次

露のいのち	7
錆びた鉄	21
飛行機雲	35
白い悪鬼	47
井太郎	60
夜の口笛	74
ふくろ帯	89
地唄舞う人	99
ワニ革の靴	113
擬態	127
木石	140
猫やなぎ	152
逆コース	167

粉	雪	181
西伊豆の湯		195
波打際の女		209
鯉の音		223
愛の応酬		238
白い渚		253
火の接吻		267
銀色の霧		281
Dホテル		292
ネクター		307
加害者		321
アリバイ		335

露のいのち

1

音雄は終戦後、間もなく、解放された。身体は相当、参^まっていた。ひどい栄養失調が認められる。

出所者が出る門には、誰も迎えに来ていなかった。要するに刑務所は、音雄を黙^もって、おッぽり出したにすぎない。

彼は駅前の食堂で腹ごしらえをすると、何年ぶりかで、電車に乗った。両親の家は焼けたかもしれないが、とにかくそこへ行ってみようと思った。

電車の窓から見る東京の姿は、酸^{さん}鼻^びの極であった。終戦後、大分になるというのに、つい四、五日前に焼けたばかりのような、なまなましい印象だった。

音雄はまだ夢のつづきを見るような気がした。日本が敗^まけることはわかっていたが、それでもこんなぶ^ぶざ^ざまな敗^まけ方をするとは、想像できなかった。

電車は一面の焼野原を走っているの、今はどの辺なのか、見当がつかなかった。それに、発

車の回数も少く、スピードもおそかったので、乗換えのたびに、時間がかかった。音雄は長く立っていると、苦しくなって、膝が崩れおちそうになった。省線の駅まで行く間も、人道と車道の間で、暫く、しゃがんでいなければならなかったが、街路樹という街路樹は、殆んど焼きつくされていて、残暑を避ける木蔭もなかった。

音雄は歩いては休み、休んでは歩いた。歩行は困難だったが、心はのびのびと明るかった。街の表情も、あさましいほどの傷だらけだが、然しあきらかに、日本は蘇ったのであった。

「もう大丈夫なのだろう。二度とぶちこまれるようなことはないのだろう」

と、音雄は独り言を云った。それにしても、よく生きて来られたものだった。終戦前後、所内では、思想犯は焼き殺されるというデマが飛んだ。警察でも、同じようなことが云われたそうだ。それは特高警察が潰つぶされる腹いせに、捕まっている連中を、娑婆しやばへ出したくない感情があるほかに、三木清の獄死などが報道されたので、よけい思想犯の周囲を刺激したせいでもある。

——漸くのことさで、両親の家をさがしてた。

もっとも、家といっても、トタン板で囲った壕舎ごうしゃであった。昔の家は、きれいさっぱり焼けてなくなってしまったのである。

「お母さん」

音雄はやはり、母から先きと呼んだ。母はもぐらのように、地下壕からあがってきた。

「誰れ？」

「音雄ですよ」

「まア……音雄」

母は少々、視力が衰えている風で、目を細くして、音雄の顔をたしかめると、がっかり両手を握って、

「う、う、う、う」

と、泣き出した。

「お母さん……帰ってきたんだ。泣くことはない」

「う、う、う」

万感極まった母は、言葉をなす余裕もないのだろう。

2

「お父さんは？」

「鳥渡お出かけになって、まだお戻りにならないの」

「元氣なんですネ」

「さア、どう云えばいいのかしら。音雄が見たら見違えるほど、老けておしまになりましたよ」

母はまた、ボロボロ涙を流した。音雄は静かに、母の手をはなして、地下壕の中を覗いた。ほんの半坪ほどの穴で、よくこんな所に寝起きしていられると思った。これでは、今朝までいた刑務所のほうが、よっぽど、ましである。

「それから、菊繪は？」

音雄はふりかえって、訊いた。

「それがね、濱名さんが帰ってくるといやだと云って、出ていってしまったきり、どこにいるのか、便り一つ、よこさないんだよ」

「濱名は生きているんですか」

「それもわからないの」

「戦犯で捕まってるんじゃないかな」

「では、アベコベだね。何もかも、アベコベになったと思えば、いいンでしょう」

「まアそうだね、お母さん……然し、僕も身体をやられている。これから生きてゆくのは、一苦
「労だ」

「でも、音雄たちは若いから……お父さんお母さんこそ、大へんだよ」

「僕は帰ったら、イのーに菊繪に会いたかったんだが……」

「お前がこんなに早く帰ってくるとわかってたら、菊繪だって、出てゆくことはなかったのに……」

「みんな出獄しますよ。徳田球一でも、志賀義雄でも……」

「ほんとかい。でも三木清さんなんぞは、亡くなったでしょう」

「解放の日を目の前にしてね……そういう不幸な一生もあるが」

「さア、今日は何をお祝いしましょうかね。普通なら赤の御飯を炊くところだろうが、そんな酒よ

落^おた真似は出来ないから、配給の罐詰でもあけましようか」

「無理しないで、いいですよ」

音雄はしばらく、壕舎へ入って、横になった。入って見ると、外から覗いた時よりは、広かった。どうにか、三人、寝ようと思えば寝られそうだった。

それにしても、あのプライドの高い父が、よくこんなところで我慢していられるものである。

「お母さん。どうして、疎開しなかったんですか」

「東京は絶対に焼けないって、お父さまが頑張る以上、疎開なんて出来ませんよ」

「では、治療機械なんぞ、みんな焼いてしまったんですね」

「むろんですよ」

「では、もう歯医者はやらないつもりかしらね」

「さアどうでしょう」

「一体、何ンで暮らしているんです」

「大きな声では云えないけれど、闇をやってそれで……」

「何ンの闇？」

「石鹼とか、お米とか、紙とかって……」

「では、お父さん、売って歩いてるの」

「だって、そうしなくっちゃア、どうにもならないでしよう」

「ひどく値打がさがったものだなア、加島則光も……」

音雄は昔の父を考えると、そんなことをしているのが、信じられなかった。然し、若しそれがほんとうなら、あの思い上がった父を懲らしめ、人間的な後半生へ入ることが可能かもしれぬと思つた。

「音雄、後生だから、お父さんをそんな風に恥かしめないでね……」

「うん、わかっているよ。お母さん」

「そんならいいけど……」

母こそどんなに恥かしく思っているだろうと思つて、音雄はきびしい言葉を押さえた。

「菊繪の子供はどうしたんです」

「子供だけは、伊豆の松崎のお菅のところへ預けたの、空襲がはじまるとすぐ……」

「それは賢明だったな。男の子ですか、女の子ですか……」

「男の子……」

「名前は」

「菊夫つてつけたんですよ、お父さまが」

「菊夫か。明るくっていいな」

「満で云うと、四ツですよ」

母はやっと、口もとをほころばせた。

夕方、父が帰ってきた。なるほど、大きなリュックを背負って、戦闘帽をかぶっている父の顔は、往来ですれ違った位では、わからない。

「音雄か」

父の表情には、複雑な翳^{かげ}がかすめた。

「今日、出所しました」

「そうか。それはお目出とう」

「喜んでくれるんですか」

「それは骨肉の感情として、当然じゃアないか」

「実は喜んで貰えるかどうか、危ぶんでいたんです」

「わしは、天下の形勢から、お前も早晚、出所すると思っていた」

「今までは天皇制の牢獄だったから、入れられていたんだし、これからは、また別の支配者の牢獄になるんだから、入ってはいられないという簡単な論理だけなんです……」

「特高は廃止になるらしいな」

「当然でしょう」

「お前らの天下がくるのかな」

「そんなことは云えませぬ。何しろ、占領という事実があるだけです。当分はアメリカの天下でしょう」

「まったく、われわれは、途方にくれてしまう」

と、父は弱気に云った。音雄はそういう父をやりこめたいとは思わなかった。然し、父がリュックサックを背負って、ヤミ米などを売って歩いている心の中には、今は世を忍ぶ仮りの姿で、やがて又、天下が元に戻れば、そのときは思いきり、復讐の刃を振ってやろうという、所謂、臥薪嘗胆の辛抱気でやっているとしたら、それこそ危険この上もない。

「お父さん……僕はマッカーサーに、もっともっと、日本という国を改造しておいて貰いたいですね。どうも、手ぬるいように思われて仕方がない」

「ふーン。お前、今日まで中において、いろんなことを知ってるのか」

「そりゃア最近は自由でしたよ。新聞も読めるし、ラジオも聴けるし……知らないのは、家が焼けたかどうかとか、菊繪が家出したってことは、わからなかった——」

「改造っていうと？」

「つまり、内務省を潰すなんてことだけでなく、官僚組織を全面的に廃止して、新しく組直すとか、警察という名前をやめてしまうとか……そういう必要がある。散々悪いことをやった警察の呼び名をそのままにして、中身を取替えようたって、ムリでしょう。警視総監って呼び名もいやだなア……」

「さア、そこまでは行くまい」

「多分ね……然し、そこまでやっとなないと、十年先きに、悔を残しますよ。つまり、蛇の半殺しでね……今は氣息奄々でも、案外渋とく生き返って、仇をなす例は多いんだ。やっぱり止めを刺しとく必要があるんです」